

〈研究ノート〉

英語圏カリブ海地域における男性性研究の展開 —黒人男性の「周縁性」議論を中心として—*

二 宮 健 一

I はじめに

ラテンアメリカのジェンダーを議論する論集やレビュー論文において、イベロアメリカ諸国とは言語などの文化的差異をもつ英語圏カリブ海地域は除外されがちである。しかし両地域には植民地支配に由来する人種・民族的な多様性・階層性などの共通点も多く、互いのジェンダー研究は比較対象として、あるいは中南米全体のジェンダー研究の一部として、重要な参照点といえよう。

英語圏カリブ海地域では、1970年代後半から圏内17カ国が運営する西インド諸島大学 (The University of the West Indies/以下 UWI と表記) の研究者が中心となり、人口規模、人種・民族構成、経済状況などで多様性をもつ諸国家の壁を越えたジェンダーの議論をしてきた。当初はその焦点が女性に偏向し、研究者も女性が主だったが、1980年代後半からは男性研究者も議論に参加し、男性に焦点を当てたジェンダー研究 (男性性研究) も行われるようになっていく。様々な角度からの研究が見られるが、中心的テーマとなってきたのは、黒人男性の「周縁性」に関する議論だった。

この地域の多くの国では、かつて奴隷制プランテーションの労働力としてアフリカから移入された黒人奴隷の子孫が現在でも人口の大部分を占め、肌の色が薄い少数の富裕層と、肌の色が濃い多数の貧困層によって構

成されるピラミッド型の社会構造がみられる。こうした社会構造の底辺で失業・貧困に苦しむ黒人男性は「周縁化 (marginalized)」されているとしばしば研究者によって表現される。また、黒人貧困層に多く見られる母子世帯 (fatherless household)¹⁾は社会問題として扱われ、研究対象とされてきたが、そうした家族関係においても男性は「周縁的」だとされてきた。英語圏カリブ海地域では男性性研究が開始される以前からこの二つの「周縁性」の相関が議論されてきた。本稿はこの議論の展開を整理し、最後に、黒人男性の「周縁性」を理解するためには、さらに多様な社会的差異を読み込んだ考察が必要であることを指摘する。

II 「母親中心家族」と黒人男性の「周縁性」

1 人類学者による家族研究

1940年代にアメリカ合衆国の研究者の間では、新大陸の黒人社会に多い母子世帯型の家族形態を奴隷制の遺産とする立場とアフリカ文化の残存とする立場の間で議論があった。その影響を受け、また現地で行われてきた福祉行政のための調査の流れも汲み、1950-60年代の英語圏カリブ海地域では人類学的な家族研究が盛んに行われた。後に男性性研究において再検討される「周縁的」な黒人男性像は、主にこの時期の二つの代表的な民族誌によって産出された。

イギリス人人類学者 R.T.スミスは1956年に書いた民族誌『英領ギアナの黒人家族』で、英領ギアナの黒人下層階級にみられる家族形態を「母親中心的 (matrifocal)」という語で表した。スミスによれば、彼らの間でも核家族が規範として考えられ、夫・父親には世帯集団への経済的な貢献が求められるが、男性の職が不安定なうえ女性に農作などの収入活動の機会があるため、世帯集団では母親が実質上のリーダーとなり、夫・父親は「周縁的」になりがちである (Smith 1956: 225-228)。

スミスは、この「母親中心家族」と母系 (matrilinal) 家族との違いを男性の役割に言及して説明している。母系出自社会では、男性は夫・父親

として限定的な役割しかもたないが、彼が属する出自集団でオジ・兄弟などとして経済的・政治的・地位的・儀礼的役割をもつ。それに対して、英領ギアナにはそうした母系出自集団は存在せず、男性に期待されるのはあくまで核家族的な夫・父親役割だが、男性はそれすら十分に果たせず、周縁的だという (Smith 1956 : 226-228)。

イギリスで人類学の教育を受けたジャマイカの社会福祉行政官 E. クラークは、1940年代にジャマイカの家族形態を調査し、1957年に『父でもあった私の母親 (*My Mother Who Fathered Me*)』と題された民族誌を出版した。この題名が示唆する通り、この著作は父親・夫としての役割を果たさない「無責任」な男性像を描いている。クラークによると、男性は女性を妊娠させ自分の生殖能力を証明するとそれで満足し、親となることに伴う義務を必ずしも受け入れない。そうした義務は一般的に女性が負うものと考えられており、もし男性がそれらを承認・履行せずとも公的な非難は一切無い (Clarke 1966 (1957) : 96)。また、貧困層のコミュニティでは父親は早朝に仕事に出かけ、仕事後も店や酒場で時間を過ごし、子供との親密な関係を築くことは稀だという (Clarke 1966 (1957) : 147)。子供のしつけの役割を主に担う母親の体罰には節度と愛情が伴うのに対し、父親は時に感情に任せて子供を叱り、過度の体罰を与えることが多いとしている (Clarke 1966 (1957) : 159, 161)。

スミスとクラークがこのような否定的な男性像を描いたのに対し、その後アメリカ合衆国の人類学者からは、困難の中でも家族に対する責任を果たそうとする男性が多い (Davenport 1961 : 440)、父親・夫は世帯に不在でもしばしば家族を訪れて積極的に役割を果たす (Solien 1960 : 104-105)、などのより肯定的な見方も提示された。しかしそれらはこの地域の家族研究の古典として評価が高いスミスとクラークの民族誌が生産した「周縁的」な黒人男性像を揺るがすほどではなかった。

2 「尊敬」「名声」の価値体系

人類学的な家族研究によるこうした「周縁的」な男性像の描出が、黒人男性があたかも社会的にも周縁的存在であるかのような印象を作り出していると指摘したのがイギリス人人類学者P. ウィルソンだった。当時この地域の人類学的研究は専ら世帯を研究対象にし、「周縁的」な男性像を描く一方、世帯外部での男性の生活については何も論じなかった。ウィルソンによればこうした記述の偏向によって、黒人男性は社会的にも周縁的存在であるかのような印象が作りだされているが、実際には彼らは居住地域や職場などで仲間集団を形成しており、地域コミュニティのレベルでは社会的に周縁的だとは言えないという (Wilson 1969 : 71)。

彼はさらに、この地域コミュニティの仲間集団内での男性の相互作用は、全体社会 (total society) とは異なり「名声 (reputation)」の価値体系に基づいてなされているという。この価値体系は、仲間内での名声を求めるものであり、その名声は主に「彼らにとっての他所者」、つまり地域コミュニティ外の社会的上層から課せられた法律や規則を蝕み、背き、出し抜くことの堪能さによって得られる (Wilson 1969 : 80-82)。

一方、主に女性が集う場である教会や世帯での相互作用は「尊敬 (respectability)」の価値体系に基づいているという。「尊敬」は全体社会の法律・規則や教会が説く道徳を遵奉することによって得られるものであり、なかでも法的・宗教的な制度である結婚は「尊敬」を得るための主要な手段だという (Wilson 1969 : 78)。

この「名声」「尊敬」の価値体系モデルは、地域コミュニティの仲間集団という男性的領域の存在とそこでの全体社会とは異なる価値体系の存在に目を向けさせるものではあった。しかしこのモデルは、男性を支配に対する抵抗の主体、女性を従属の主体としてそれぞれ位置づける印象を与えることから、後の研究ではむしろ女性の位置づけをめぐる批判的に取り上げられ、男性性をめぐる議論には直接結びつかなかった (e.g. Besson 1993 : 19 ; Olwig 1990 : 96)。

3 女性研究

国連が1975年を国際女性年と制定し、女性のジェンダーに関するより広範な調査研究の必要性を呼び掛けた影響もあり、1970年代後半には英語圏カリブ海地域でも様々なジェンダー研究が行われはじめた。中でも1979-82年にUWIが行った「カリブ海地域の女性プロジェクト (WICP)」は最大規模の研究プロジェクトだった。このプロジェクトの中心課題は、貧困層女性の経験や意識を女性研究者が聴取・分析することで、「母親中心家族」を女性の視点から再解釈することだった。

彼女らの研究報告から、拡大家庭的な女性同士のネットワークによる相互協力関係の創出や、複数の男性との交際による支援の引き出しなど、貧困を生き延びるための女性の主体性や戦略が明らかにされた (e.g. Mas-siah 1983 : 57-58 ; Barrow 1986 : 169-170)。

その一方で、この地域における男性支配イデオロギーの根強さも強調された。女性が実質的な世帯主として経済的自律性と家庭領域での権威を持ち、貯金の用途、家事の分担、食費などの面では決定権を持つ場合でも、居住地や借金の是非などの「大きな管理事項」では男性が決定権を持つ場合が多いとされた (e.g. Powell 1986 : 107 ; Safa 1986 : 16)。このプロジェクトの結論でUWIの社会学者P. アンダーソンは、この地域の女性のジェンダー意識の特徴として「自立」意識の高さと「平等」意識の低さを挙げている。女性は自由を得るためにパートナーの男性から経済的に自立する必要性を強く意識しているが、かといってパートナーの男性と対等になるべきとは考えておらず、女性は男性に主導的な立場をゆずり、彼らに従うべきと考える傾向が強いという (Anderson 1986 : 312-322)。

これらの研究では、女性にのみ焦点が当てられ、男性の経験や意識は拾い上げられないままだった。したがって女性によって語られる男性の経済的な貢献度の低さや役割遂行の不十分さがおのずと強調され、1950-60年代の家族研究における周縁的な男性像がそのまま再生産されていた。こうした黒人男性像は、次に見るミラーの「周縁仮説」をめぐる議論を経て、

その後の男性性研究において再考されることになる。

Ⅲ 男性性研究における「周縁性」再考

1 ミラーの「周縁仮説」

英語圏カリブ海地域で男性性研究が始まる契機となったのは、UWIの教育心理学者 E. ミラーが1986年に出版した『黒人男性の周縁化』が引き起こした議論だった。当時のジャマイカでは、小学校教員の87.3%、中・高等学校教員の65.9%が女性だった。生徒の男女比は、中・高等教育では優秀な学校ほど女子生徒数が多く、最高学府の UWI では全学生の56.1%が女性という状況だった。ミラーは、こうした教員・生徒における女性の多さを、教育機関における黒人男性の「周縁化」と見なした (Miller 1986: 1-4)。さらにミラーは、同様の現象は教育制度以外の領域でも見られ、貧困層での女性世帯主の多さ、教会コミュニティや公共部門の雇用における女性の多さなどが相互作用、補強しつつ黒人男性を周縁化していると論じた (Miller 1986: 5)

ミラーによると、こうした黒人男性の周縁性はジャマイカを支配してきた白人男性による教育制度の操作によって意図的に作り出された。1838年の奴隷解放後、教会が設立した小学校と教員養成校は黒人の社会的地位上昇の要だった。当初は男性教員がほとんどだったが、19世紀後半になると支配層の白人男性は黒人男性教員と彼らが育てる男子学生が社会変革を起こすのを恐れ、男性教員を減らし女性教員を増やす方策をとったという (Miller 1986: 60)。ミラーが考察したのはこうした教育機関の歴史的編成のみだが、彼はそこでみられた白人男性による黒人男性の周縁化と黒人女性の優遇をジャマイカ社会の一般的傾向とし、こうした見方を「周縁仮説」と呼ぶ。フェミニズムの成果とされる黒人女性の社会進出も、実際には支配層の白人男性による黒人男性の周縁化の表れにすぎないとも述べている (Miller 1986: 6, 76)。

ミラーの「周縁仮説」は、ジャマイカ以外の英語圏カリブ海諸国でも女

性運動へのバックラッシュ的な議論でしばしば引用された²⁾ (Baritteau 2003: 337)。一方、この地域の研究者たちはあらゆる角度からミラーの仮説に批判を加えた。ミラーが白人男性の企てとした男子の学業不振の本当の原因は、彼らに影響するこの地域の男性性が学業を「女々しい (sissy)」ものとするから (Parry 2004)、男子が放任主義的に育てられるから (Figuroa 2004)、男子は経済的な期待に応じて就職を優先するから (Chevannes 1999)、などと反論された。ミラーが男性教員の少なさを周縁化と見なしたことに対しては、職場や組合の権力関係ではむしろ女性が周縁化されていると反論された (Downes 2003)。さらに、ミラーのいう貧困世帯や労働市場での男性の周縁化については、世帯主になることは権力を持つことを意味せず、女性世帯主は男性世帯主よりも経済的に貧しく、女性は男性より失業率が高く³⁾、伝統的に男性が担ってきた職種には進出しておらず⁴⁾、男性より低賃金・低地位の労働に従事していると反論された (Lindsay 2002)。

このように研究者の評価は総じて否定的だったが、この著作がもたらした議論が刺激となり、それまで女性に焦点を偏重させていた同地域のジェンダー研究は男性にも目を向けるようになった。

2 UWI によるプロジェクト研究

家族研究・女性研究で描出された男性像の本格的な見直しが初めて行われたのは、1990年代前半にUWIの研究者により行われた、カリブ海地域のジェンダーについての三つの質的調査プロジェクトにおいてだった。1991年に①「カリブ海地域の男性による家族への貢献」、1993年に②「カリブ海地域のジェンダー社会化 (gender socialization)」、1994年に③「カリブ海地域の家族とジェンダー関係の特質」と題されたプロジェクトが開始された。①では家族における男性の性別役割に焦点が当てられた。②、③では10代までの男子・女子のジェンダーに焦点が当てられたが、女性研究プロジェクトとは異なり男性側の経験や意識も十分に取り上げられた。

これらのプロジェクトには、家族研究・女性研究で描出された男性像やミラーの「周縁仮説」を検証しようという意図があった。①、②の報告書の序文では、研究の背景として、「無責任」、「家にいない父親 (absent father)」といったステレオタイプを再検討する必要や、「家庭領域などにおいて知覚される男性の周縁化とその原因をめぐる論争」「学校制度における男性の成績不良」などの問題が挙げられている (Brown and Chevannes 1998 : 6)。

①、②に基づく研究論文では、失業・低収入により父親として期待される経済的役割が果たせない男性は、その代わりに家事や育児を担当する機会が多いが、そうした「女性的」と見なされる役割では肯定的な自己イメージを獲得できていないことが明らかにされた (Brown et al. 1997 : 112 ; Brown and Chevannes 1998 : 9)。さらに、同プロジェクトでディレクターを務めた UWI の人類学者 B. シェバンズは、ジャマイカの未成年母親支援施設でも調査し、一人の女性にコミットせず、妊娠させても責任を取らないジャマイカ人男性というステレオタイプに反し、青年男性は交際相手が妊娠した場合には彼女のもとを頻繁に訪れ、精神的に支えているとした (Chevannes 1999 : 7-9)。

男性のみを非難することへの反論もなされた。シェバンズによると、女性に対して貞節ではなく複数の交際相手を持つというジャマイカ人男性のステレオタイプに反し、彼が聞き取り調査した男性のうち複数の交際相手をもつのは半数に過ぎない。また、そもそも多くの男性が複数の交際相手を持つことが可能なのは、女性も同様に複数の交際相手をもっているからだという (Chevannes 1999 : 5-6)。③で得られたデータを基にジャマイカとバルバドスの都市貧困層の少年の男性性について論じた UWI の社会福祉学者ブランシェによると、彼らが一人の女性にコミットしないのは、女性も男性同様一人の交際相手にコミットしないため、相手に裏切られ、利用されて深く傷つくのを防ぐためだという (Branche 1998 : 193-194)。

黒人男性の「暴力」も議論された。1960年代半ばから二大政党と癒着して成長したギャング集団は、1980年代半ばからは政治との関係を薄めつつ集団間抗争を激化させた。この頃に銃を凶器としたギャング関連の殺人が急増し、1990年代後半にはジャマイカの殺人事件発生率は世界10位と言われるまでになった (Harriott 2003 : 91-92)。シェバンズは銃犯罪蔓延の原因を、ギャング抗争だけでなく、男子の社会化の場であるストリートの仲間集団で銃が仲間からの尊敬を保証し、かつ性的比喩として男性アイデンティティの象徴になっていることに見出している (Chevannes 1999 : 28-31)。

1990年代の英語圏カリブ海地域諸国では女性に対する暴力も問題視され、相次いでDV防止法が制定されたが、ブランシェは、少年の女性に対する暴力は、貧困を生き延びるためにタフで攻撃的にならざるを得ないという「制約された (restricted) 男性性」の表れだとした (Branche 1998 : 197-199)。

以上概観したように、プロジェクト研究を通して、「周縁的」「無責任」「暴力的」といった黒人男性のステレオタイプが見直された。全体として、貧困による男性性形成の障害が強調されることで否定性は希釈されたといえよう。また、プロジェクト研究のもう一つの成果として、シェバンズを中心に小規模だが男性運動団体 Fathers Inc. が発足し、父親役割についての啓蒙活動を行っていることが挙げられる。2009年には政府の女性問題局内に男性デスクが設置され、同団体メンバーの一人が担当者となっている。

3 人種・階級的差異と男性性

上記のプロジェクト研究では、現地研究者たちは貧困層に焦点を偏重させ、社会問題である貧困・犯罪・暴力などと男性性の相関を優先的に考察する一方、この地域の社会を特徴づける人種・階級的階層性と男性性の相関についての考察を欠いていた。この点を補うように、2000年前後から

は、男性性研究の主導者的存在であるオーストラリア人社会学者 R. コンネルが提唱した「ヘゲモニックな男性性」(Connell 2005 [1995]) 概念を導入し、人種・階級間の権力関係と男性性の相関に焦点を当てた研究が増えている。

一例を挙げれば、UWI の歴史学者、H. ベックルスは奴隷制下での黒人の男性性形成を論じている。彼によれば、黒人男性奴隷は、支配者の白人男性と基本的な家父長制的価値観を共有していたにも関わらず、黒人女性奴隷に対して供給者・保護者の役割を果たせず、むしろ白人農園主から衣食住を供給される立場にあるため「女性化」「幼児化」されて白人から認識・表象されていた。また、奴隷制は徹底した軍事力と暴力的処罰によって支えられてもいたが、この地域で起こった奴隷反乱の多さにも明らかのように、黒人男性奴隷は白人からの暴力を自らも内面化したという。こうして「白人の男性性のヘゲモニックな構造」の中で形成された「従属的な黒人の男性性」は、白人のヘゲモニーが温存され、多くの黒人男性が依然周縁化・従属化されている現在でも形成され続けているという (Beckles 2004 : 227-241)。

ベックルスの研究は「ヘゲモニックな男性性」概念を用いて人種間の権力関係と男性性形成の相関を説明している。一方、現在の英語圏カリブ海地域には奴隷制時代のような堅固な人種主義的支配体制はなく、「ヘゲモニックな男性性」概念を用いて人種・階級ごとに別個の男性性を想定する考察は本質主義的になりがちである。しかし、かつて人種・階級ごとに差異が際立っていた男性性が現在完全に融合しているわけでもない。次に挙げるバロウのように、それらが二重の男性性として残存していると見ることできる。

バルバドスで調査研究を行った UWI のイギリス出身人類学者 C. バロウによれば、カリブ海地域の黒人男性は父親・夫としては限定的な役割しか果たしていないが、息子・オジ・兄弟として家族に対する援助を行っている。1950-60年代の家族研究は、「母親中心家族」を母系家族から差異化す

る意図もあり、男性を専ら父親・夫として想定し、世帯を超えた親族関係にも注意を払わなかったため、男性の家族への貢献を過小評価し、「無責任」で「周縁的」な男性像を描いたのだという (Barrow 1998a : 344-349)。

この批判はウィルソンの「名声」「尊敬」モデルの批判にもつながっている。このモデルは男性が「名声」の価値体系の中でのみ生きている印象を与えるが、実際は男性は「尊敬」の価値体系が働く家族での「家族的な男 (family man)」と「名声」の価値体系が働く仲間集団での「奴らのひとり (one of the boys)」という二つのアイデンティティのバランスをとって生きている (Barrow 1998a : 343-357)。バロウはこのような価値の二重性を「理想的なキリスト教的男らしさ (ideal Christian manhood)」「黒人のサブアルタンの男性性 (black subaltern masculinity)」のダブル・スタンダードとも表現し (Barrow 1998b : 37)、それらを使い分ける男性の主体性に注目している。

バロウによれば、この二つの男性性は植民地の歴史のなかで形成された。奴隷制の下での黒人男性奴隷の男性性形成については、彼女はベックルスとはほぼ同じ見方をしている。一方、奴隷解放後には、植民地行政は彼らが適切と考える「社会的・道徳的・ジェンダー的コード」によって黒人の教化を試みたが、黒人が置かれた社会・経済的な苦境の中ではそれは達成し得なかったという (Barrow 1998b : 37-40)。現在でも「理想的なキリスト教的男らしさ」は社会経済的中間層でより強く働いていることが、バロウの調査資料から読み取れる (Barrow 1998b : 46)。

この地域の男性性研究の火付け役だったミラーの「周縁仮説」も人種・階級的権力関係に主眼を置いた研究だったが、その考察対象は黒人男性の社会的地位の形成過程に終始していた。それに対してベックルス、バロウらの議論は、人種・階級的権力関係の下での黒人男性の男性性の形成過程とその現在の機能を考察している。人種・階級とジェンダーの交差性についての研究として、より深化したといえよう。

IV おわりに

以上のように、英語圏カリブ海地域の男性性議論は黒人男性の「周縁性」をめぐって展開してきた。家族研究・女性研究において現地研究者が描出した「周縁的」かつ否定的な黒人男性のイメージは、男性性研究によって規範的な夫・父親役割とは異なる形での家族への貢献、貧困による男性性形成の阻害、人種主義的社会構造の男性性形成への影響などが強調されることでその否定性が弱められている。

最後に、この研究展開の整理を通して課題として浮上するものを指摘するならば、男性性の差異・多様性がまだ十分に議論されていないことであろう。中・上流階級、白人、インド系、中国系などの男性性を扱った実証的研究はまだ少ない。これらの男性性を明らかにしたうえで、より包括的に貧困層黒人男性の「周縁性」を再考する必要がある。またこれまで「周縁性」議論が焦点を当ててきた、貧困層黒人男性というカテゴリーの内部も決して均質ではない。セクシュアリティ、世代、宗教などにより生じる内的差異とその間の諸関係が男性性形成にどう影響するのかも考察する必要がある。

これまでの「周縁性」議論との関係で特に重要なのは、キリスト教徒の男性性を明らかにすることだろう。奴隷解放後、黒人たちにとってキリスト教徒になることは西洋的文化の習得と同様に社会的地位上昇の手段の一つだった。現在でも、キリスト教徒的な性規範・性別役割は社会的中・上層でより遂行されやすいが、貧困層にも根本主義的な信仰生活を送るキリスト教徒が少なくない。例えば人類学者オースティン＝ブルースによると、ジャマイカの貧困層で多数派のペンテコステ派教会員は、厳格な信仰生活により他の貧困層黒人から自分たちを差異化しつつ、道徳性と靈性において白人や社会的中・上層に優越することを主張することで、彼らを社会的底辺に位置づけるヘゲモニーと交渉している (Austin-Brooks 1997: 233-239)。こうした信仰生活を送る貧困層の黒人キリスト教徒男性のジェンダー意識・実践、社会的地位上昇の可能性、貧困層の非キリスト教徒黒

人男性との関係などを問うことで、男性性を介した黒人男性の周縁化作用や人種・階級的ヘゲモニー編成をキリスト教の社会的機能との関係から考察できると考えられる。

こうしたより多様な社会的差異と男性性形成の関係の考察を今後の課題としつつ、当地域とイベロアメリカ地域の男性性研究の比較も射程に収めたい。イベロアメリカの男性性研究では、メスティサヘ主義から多文化主義への移行に伴う人種・民族的差異への注目、1980年代の経済危機や女性の社会進出に伴う夫・父親役割の変化への注目、「マッチョ」ステレオタイプの問い直しなど (Gutmann and Vigoya 2005)、英語圏カリブ海地域と共通する研究動向が見られる。両地域の社会背景をより深く読み込むことで、それぞれの男性性研究動向の共通性と独自性をより明確にできると考えられる。

*本稿の執筆にあたっては、神戸大学の柴田佳子先生に何度も丁寧なご指導を賜りました。また二名の査読者からも的確なコメントをいただきました。併せて心より感謝申し上げます。

註

- 1) 母子世帯数の統計は無く、代わりにしばしば世帯主性別の統計が引用される。2000年度の国勢調査によると、英語圏18カ国における女性世帯主率は平均で36.8% (CARICOM 2009: 22)。「世帯主」の定義や家族形態は文化により異なるため安易に比較できないが、例えば国連の『世界の女性』1995年版では「カリブ海地域」が世界で最も女性世帯主率が高い地域とされている (United Nations 1995: 6)。
- 2) その後も高等教育における女子学生数は増加し、2009年には UWI 学生の73%が女子であり、男性的分野の教育機関といわれるジャマイカ工科大学でも55%が女子学生となっている (PIJ 2009)。こうした状況を受け、現在でもミラーの「周縁仮説」は現地の新聞の投書やコラムでしばしば引用される。
- 3) 1990年のジャマイカにおける失業率は、男性9.3%、女性23.1% (PIJ 2000)。2009年には男性8.6%、女性14.8%と、依然男女差が大きい (PIJ 2009)。
- 4) 1991年の統計によれば、女性雇用数が男性雇用数を上回る職種は、「サー

ビス業 (68%)」「専門職、経営者、管理職 (59%)」「事務・販売職 (62%)」。ただし、「専門職」には慣習的に女性の仕事とされてきた教師と看護師が含まれる (Lindsay 2002 : 67)。

参考文献

- Austin-Broos, Diane J. 1997. *Jamaica Genesis : Religion and the Politics of Moral Orders* (Chicago : The University of Chicago Press).
- Anderson, Patricia. 1986. "Conclusion : Women in the Caribbean," *Social and Economic Studies* 35 (2), pp. 291-324.
- Bailey, Wilma, Clement Branche, Gail McGarrity, and Sheila Stuart. 1998. *Family and the Quality of Gender Relations in the Caribbean* (Jamaica : Institute of Social and Economic Research, the University of the West Indies).
- Baritteau, Eudine. 2003. "Requiem for the Male Marginalization Thesis in the Caribbean : Death of Non-Theory," in Eudine Baritteau (ed.), *Confronting Power, Theorizing Gender : Interdisciplinary Perspectives in the Caribbean* (Jamaica : UWI Press), pp. 324-355.
- Barrow, Christine. 1986. "Finding the Support : A Study of Strategies for Survival", *Social and Economic Studies* 35 (2), pp. 131-175.
- 1998a. "Caribbean Masculinity and Family : Revisiting 'Marginality' and 'Reputation'," in Christine Barrow (ed.), *Caribbean Portraits : Essays in Gender Ideologies and Identities* (Jamaica : Ian Randle Publishers), pp. 339-358.
- 1998b. "Caribbean Masculinities, Marriage and Gender Relations : Ideologies and Contradictions," in W. Bailey (ed.), *Gender and Family in the Caribbean* (Jamaica : Institute of Social and Economic Research, UWI), pp. 32-52.
- Beckles, Hilary. 2004. "Black Masculinity in Caribbean Slavery," in Rhoda Reddock (ed.), *Interrogating Caribbean Masculinities : Theoretical and Empirical Analyses* (Jamaica : UWI Press), pp. 225-243.
- Besson, Jean. 1993. "Reputation and Respectability Reconsidered : A New Perspective on Afro-Caribbean Peasant Woman," in Janet Momsen (ed.), *Women & Change in the Caribbean* (Jamaica : Ian Randle Publishers), pp. 15-37.
- Branche, Clement. 1998. "Boys in Conflict : Community, Gender, Identity and Sex," in Wilma Bailey (ed.), *Gender and the Family in the Caribbean* (Ja-

- maica: Institute of Social and Economic Research, the University of the West Indies), pp. 185–201.
- Brown, Janet and Barry Chevannes. 1998. *Why Man Stay So: An Examination of Gender Socialization in the Caribbean*, (Jamaica: the University of the West Indies).
- Brown Janet, Arther Newland, Patricia Anderson, and Barry Chevannes. 1997. "Caribbean Fatherhood: Underresearched, Misunderstood," in Jaipaul L. Roopnarine and Janet Brown (eds.), *Caribbean Families Diversity among Ethnic Groups* (New York: Ablex Publishers), pp. 85–113.
- CARICOM. 2009. *Regional Special Topic Monograph on Gender and Development Issues: Based on Analysis of the 2000 Round Census Data of Eighteen Caribbean Countries (Draft Report)*. (www.caricomstats.org, downloaded on04/11/2011).
- Chevannes, Barry. 1999. *What We Sow and What We Reap: Problems and the Cultivation of Male Identity in Jamaica* (Jamaica: Grace Kennedy Foundation).
- Clark, Edith. 1966 (1957). *My Mother Who Fathered Me: A Study of the Family in Three Selected Communities in Jamaica* (London: George Allen & Unwin Ltd.).
- Connell, R. W. 2005 (1995). *Masculinities* (2nd edition) (Barkley and Los Angeles: University of California Press).
- Davenport, William. 1961. "The Family System of Jamaica," *Social and Economic Studies*10(4), pp. 420–454.
- Downes, Aviston. 2003. "Gender and the Elementary Teaching Service in Barbados, 1880–1960: A Re-examination of the Feminization and Marginalization of the Black Male Theses," in Eudine Baritteau (ed.), *Confronting Power, Theorizing Gender: Interdisciplinary Perspectives in the Caribbean* (Jamaica: UWI Press), pp. 303–323.
- Figueroa, Mark. 2004. "Male Privileging and Male 'Academic Performance' in Jamaica," in Rhoda Reddock (ed.), *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analysis* (Jamaica: UWI Press), pp. 137–166.
- Gutmann, Matthew C. and Mara Viveros Vigoya. 2005. "Masculinities in Latin America". in Michael S. Kimmel, Jeff Hearn and R.W. Connell (eds.), *Handbook of Studies on Men & Masculinities* (Thousand Oaks: Sage Publications), pp. 114–128.

- Harriott, Anthony. 2003. "Social Identities and the Escalation of Homicidal Violence in Jamaica," in Anthony Harriott (ed.), *Understanding Crime in Jamaica: New Challenges for Public Policy*. (Jamaica: UWI Press), pp. 89–112.
- Lindsay, Keisha. 2002. "Is the Caribbean Male an Endangered Species?," in Patricia Mohammed (ed.), *Gendered Realities: Essays in Caribbean Feminist Thought*. (Jamaica: UWI Press), pp. 56–82.
- Massiah, Joycelin. 1983. *Women as Heads of Households in the Caribbean: Family Structure and Feminine Status* (United Kingdom: UNESCO).
- Miller, Errol. 1986. *Marginalization of the Black Male: Insights from the Development of the Teaching Profession* (Jamaica: Institute of Social and Economic Research, the University of the West Indies).
- Olwig, Karen F. 1990. "The Struggle for Respectability: Methodism and Afro-Caribbean Culture on 19th Century Nevis," *New West Indian Guide* 64(3/4), pp. 93–114.
- Parry, Odette. 2004. "Masculinities, Myths and Educational Underachievement: Jamaica, Barbados, St. Vincent and the Grenadines," in Rhoda Reddock (ed.), *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses* (Jamaica: UWI Press), pp. 167–224.
- PIJ (Planning Institute of Jamaica). 2000. *The Construction of Gender Development Indicators for Jamaica* (Jamaica: Planning Institute of Jamaica).
- 2009. *Economic and Social Survey Jamaica 2009* (Jamaica: Planning Institute of Jamaica).
- Powell, Dorian. 1986. "Caribbean Women and Their Response to Familial Experiences," *Social and Economic Studies* 35(2), pp. 83–130.
- Safa, Helen I. 1986. "Economic Autonomy and Sexual Equality in Caribbean Society," *Social and Economic Studies* 35(3), pp. 1–21.
- Smith, Raymond T. 1956. *The Negro Family in British Guiana: Family Structure and Social Status in the Villages* (London: Routledge & Kegan Paul Ltd).
- Solien L., Nancie. 1960. "Household and Family in the Caribbean: Some Definitions and Concepts," *Social and Economic Studies* 9(1), pp. 101–106.
- United Nations. 1995. *The World' Women 1995: Trends and Statistics* (New York: United Nations).
- Wilson, Peter. 1969. "Reputation and Respectability: A Suggestion for Caribbean Ethnography," *Man* 4(2), pp. 70–84.